

私におけるケアウィルの意味

精神科医 本田徹

人文や社会に関わるどのような「知」も、万人が納得せざるを得ない「真」を獲得することは難しいことだと考えています。しかし、私たちはこの社会の中に生きてゆくなかで、共有できる問題を見つけ、その解決のためにも力を合わせようとしてきました。

おそらくケアウィルは、そうした私たちの努力の一環です。そしてそれは、万人に納得できる「真」を求めているのではなく、私たちが共に生きてゆくための「知」を求めての作業だと考えています。

人は生まれそして死にます。これは死後の世界を想定する人々にあっても一応の共通認識です。その生から死の人間の時間を私たちは生涯と名づけます。その生涯を精神医学では、大まかに「乳幼児期」、「児童期」、「思春期・青年期」、「成人期」、「壮年期」、「老年期」に分けています。しかし1980年以降でしょうか、この人間の生涯の年齢区分は根本的な現実との齟齬を抱え始めました。それは第一に「児童・青年期」が延長したことと、「壮年期」と「老年期」の延長という現実からもたらされました。平明に言ってしまうと、50歳ぐらいまでの壮年期の活動力が60歳を過ぎてもまだあるし、老年期の始まりも10年から15年遅れて身体的心理的にやってくる、そして老年期すら、定説化された期間よりはるかに長いという現実に出会っているということです。つまりこれまでの「知」が、現実についていけていません。心身の「壮年期」でありながら、社会的な「老年期」に出会う、私たちはその人自身と社会の齟齬と不如意を乗り越える「知」を求めねばならない時代に生きていると感じます。

私が思うことが「真」であると言い切る自信はありませんが、幼い頃から60歳近くあるいは60歳を超えてつらぬき人を支えてきた原理があるように思います。それは、1. 孤立しないこと、2. 自分の何かを共有できる仲間、誰かを持ち続けること、3. 自分の持てる力をふるえる場を見出しその評価を受けること、そして4. 家族の支えがあることのように思います。これは年齢に関係ありません。ですからケアウィルとは、これまで生きることあるいは生きてきたそれを、社会の趨勢に抗して自分たちがどう作れるのかの試みであると考えています。

老いることとは失うことと奪われることとの戦いです。しかし老いることによって大事なことが見えてくるという「武器」を手に入れます。「よく笑う兵隊が良く戦う」というひそみにならえば、ケアウィルは、私たちが良く笑うことを目指しているといえるのではないのでしょうか。